



TITLE:

# 自閉症スペクトラム障害の人の内面の理解

AUTHOR(S):

多田, 昌代

---

CITATION:

多田, 昌代. 自閉症スペクトラム障害の人の内面の理解. 京都大学カウンセリングセンター紀要 2013, 42: 41-52

ISSUE DATE:

2013-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/185344>

RIGHT:

# 自閉症スペクトラム障害の人の内面の理解

多 田 昌 代\*

## I はじめに

この仕事を始めて10年ほどは発達障害という概念を知らなかった。不可解で、学んできた理論では理解できないと感じるクライアントはいたものの、わからないなりにわかろうと努力し、クライアントの方もなぜかけっこう続けてくれたように思う。しかし、うまくいっても何が良かったのかよくわからない。経験を積んでいけばわかるようになるのかと漠然と考えていたが、それが発達障害であると知り、定型発達とは違う考え方、見方をしなければならいことがわかったと、筆者はうれしかった。どの方向に行けば良いかわかったからである。

数年前ある学生のケースに困り果て、発達障害のエキスパートの先生にスーパーヴィジョンをお願いした。先生の言われることをなぞるのでせいっぱいであったが、無事それなりの着地点を見出して終結した。しかしふり返ってみてなぜそうすることが正しかったのか、本当にはわかっていない。勉強し直さなければと、自閉症研究や発達心理学の文献を読みあさり、何人かの言語能力の高い発達障害の人の心理療法を受け持った。そうするうちに、彼／彼女らの心に共感している自分に気づき、そのまま伝えてみると、普段他者から理解されることの少ない彼／彼女らは喜んでくれるようであった。

そんな頃、ある初心のカウンセラーのスーパーヴィジョンを頼まれた。クライアントは小さい頃に診断を受けた発達障害の男子で、思春期にさしかかっている。ずいぶん社会性を身につけていて、特に難しいことはないのだが、バイジーにはすこぶる不可解に感じられるようであった。人柄も臨床のセンスも良いバイジーであったので、知的な理解は追いつかなくてもケース自体はうまくいった。筆者もそうであったが、発達障害の臨床は知的に理解できていなくても対応が良ければうまくいく。このため、間違った信念を持った臨床家が、実践的には発達促進的対応をしようまくいき、うまくいったことがその信念の証拠であるかのように扱われ、間違った理論化が行われるということが起こるように思われる。Klein (1930/1983) のディックの症例などはこの有名な例であろう。

しかし人柄を成功の要因に挙げていては実践としては良くても、学としては成り立たない。また実践的センスは伝わりにくく、書物になった間違った理論は広がりやすい。発達障害の臨床がより有用なものになっていくためには、実践がエビデンスに基づいた知的理解に裏打ちされていることは大変重要であると思われる。エビデンスばやりに拒否反応を起こす臨床家もいるし、確

---

\* 京都大学カウンセリングセンター

かであると考えられた知見や理論がその後に覆されるという歴史を考えると、どこまで信じて良いのかと疑う者もいるかもしれない。しかし定型発達の臨床家による事例研究は定型発達の視点で語られており、どこまでが本当にそのクライアントの反応なのか、その臨床家の説明は妥当なのか、誰にも確かめようがない。現在の状況では、客観的な立場で創意工夫をこらした実験によって得られたデータから学ぶ方が得るものが大きいように思われる。

以上のように考え、本論文は発達障害の人の心の内面を理解するために必要な観点について知的に理解するため主に発達心理学から得られた知見にしたがって論じることを目的とする。ここまでは発達障害と呼んできたが、今年改訂される予定のDSM-5では広汎性発達障害のカテゴリーは、自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorders : ASD) という名称のカテゴリーに書き換えられることがほぼ決定しているとのことである (黒木, 2012)。これは重度の知的障害を伴うような自閉症から定型発達に近い者まで、1つの連続体 (スペクトル) をなしているという概念である。成長し、障害が個性の範囲におさまっていく彼／彼女らを見ていると、カテゴリーで分ける分類よりも定型発達と地続きであると考えの方がしっくりくることもあり、本論文でもここからはASDと呼ぶことにする。

それではまず、行動特性を理解するために考えられた心理学的仮説について検討する。

## II 心理学的仮説と生得性

ASDの多様な行動特性を説明するためにいくつもの仮説が提唱されている。そのうちの主だったものは次の3つである。

1つは『実行機能障害仮説』と呼ばれるものである。実行機能とは『活動をコントロールする能力』のことであり、この仮説はASDの特徴を、活動を計画すること (実行の調整) と注意の切り替えの能力の障害によって説明しようとする。彼／彼女らは1つの行動を始めると適当なところで中断することができず、生活面でトラブルが耐えない。ある人は研究室に何時に行く、という明確なルールがないために用意ができたなら行くという習慣にしていたが、時計を持つという習慣がなかったため (一人暮らしをするまでは家族が起こしていた)、テレビをつけっぱなしにしていた。テレビの内容が興味を引かなければ早く登校できるが、興味を引かれるとその番組が終わるまでテレビの前から離れることができず、研究に支障が出るほど登校が遅くなることがあった。Baron-Cohen (2008/2011) はこうした特性について、「定型的な脳は、心の中で同時に複数の課題を遂行し、二重焦点を維持できる。自閉症やアスペルガー症候群の人たちは、シングルフォーカス (単焦点) なので、同時遂行能力が低いのであろう」と述べている。

この例のように彼／彼女らはよく約束を忘れたり遅刻したりするが、定型発達の人はそれを何か意図があるものと解釈しやすい。大学院生になって「テレビを見ていて遅くなりました」と言ったりするとやる気がないと否定的にとられるだろう。精神分析的なアプローチでは、遅刻やキャンセルは治療に対する抵抗として解釈するが、実行機能の障害である場合、この解釈は妥当では

なくなる。<sup>注1)</sup>

2つ目の『弱い全体的統合仮説』は、情報を意味ある全体にまとめ上げようとする動因が弱いことを取り上げている (Frith2003/2009)。細部に注意を向けやすく機械的記憶に長けているが、全体から理解する力が弱く、要点を抽出することや文脈を理解することが苦手とされる。テストの成績は良いがレポートになると芳しくない、という訴えはよく聞かれることである。卒論作成でつまづく人も多く、これには先の実行機能の問題も関連してくる。Baron-Cohen (2008/2011) はこうした特性と感覚過敏とを結びつけている。彼/彼女らが他の人が気づかないようなほんの小さな違いやかすかな刺激に反応することが指摘されているが、こうした生理学的な過敏さが細部への注目という特性の基盤にあると考えるのは妥当なように思われる。

しかし、こうした弱さは全ての人に当てはまるわけではなく、論理的思考力が高く優れたテキスト理解をする人もいる。包括的な理論を作り上げた天才の何人かはアスペルガー症候群であったと言われており、この仮説はこれらの天才の存在を説明できないという限界が指摘されている (Baron-Cohen, 2008/2011)。

最も有名なのは、『心の理論障害仮説』であろう。これは自閉症の特性は「心を読むという人間の基礎的な能力の障害によるものである」とする説である (Baron-Cohen et al., 1985)。すなわちASDの人は、自分とは異なる他者の心の状態を思い浮かべたり、理解することに困難があるために、社会的・対人的なコミュニケーションの障害が生じていると考えるのである。しかし欠損ではなく遅れであるということが明確になったため (Happe, 1995)、Baron-Cohen (1995/2002) はこの仮説を『マインドブラインドネス仮説』という理論に修正した。これは注意の共有に障害があることに注目し、このために心の理論の獲得を遅らせ、結果として社会性の発達の困難を招くとするものである。

これらの仮説はASDの行動特性のすべてを包括的に説明するというわけにはいかないが、障害特性を理解する上では有用である。また定型発達とASDの違いに神経基盤があるという視点から両者の違いを強調しており、これらの仮説を支持する研究者らはさらに生物学的な研究が進むことを期待している。

ASDが生物学的なものに由来することはかなり確かなことらしく、佐藤・魚野・十一 (2009) などを読むと、行動的基本障害 (対人相互作用や情動的行動様式) と脳部位とが対応していることなどが明らかになりつつあるとのことである。しかしこうした神経レベルの特異性は乳児の脳で発見されたわけではなく、かなり発達した後で見出されていることから、経験や学習の結果として違いが生じているとする研究者も多いようである。

ASDの子どもは、定型発達の子どものたちには魅力的となるはずのヒト刺激に注意を向けようとしないために (Dawson et al., 1998)、間主観的關係を発展させていくことができないということがわかってきた (Hobson, 1993/2000、遠藤、2005、2012)。Tomasello (1999/2006) は自閉症を無人島で育った野生児というメタファーで描写しているが、養育者に注意を向けずモノとヒトの

区別がないかのようにして育っていく様は確かに無人島にいるかのようにであり、環境因として不利な状況であろう。遠藤（2005）はこれを「初期要因としての人に対する相対的無関心」と表現し、それが社会的理解を促進するはずの養育者の直感的育児の機能不全を起こすとし、「自閉症特有の問題や症状が、単に遺伝子の特異性だけではなく環境も巻き込んだ個体発生プロセスの特異性の帰結として理解される必要性」を指摘している。また神尾（2009）は、「おそらく胎生期から神経発達の異常が始まると思われる自閉症を、そしてその多様性を対人的障害の観点で眺めると、一般に対人的能力は十数年以上かけて成熟するのであるから、その発達過程で生じる代償という発達現象が、研究の面でも、治療の面からも重要となる」としている。

遺伝と環境のどちらも重要であることは、定型発達と同じであろうが、その代償の仕方を捉えていくことが内面理解と深く関連しているのは間違いないだろう。神経学的に定型でない子どもがどのように育っていくことになるのかというプロセスを順に見ていくこととする。

### Ⅲ 情動

情動は発達とともに分化していく。乳児は内的な主観的状态に対応した表出の仕方を、養育者による適切なフィードバック（ミラーリング）によって獲得していくと考えられている。表情や行動での表現は種としておおまかに決まっているだろうが、適切な行動の基準は養育者によって影響を与えられるものであろう。また情動の制御も、はじめは養育者が全面的に担いながら、養育者の内面を経由して、徐々に子ども自身でできるようになっていく。これは模倣学習以上のものである。自分の情動が養育者を動かすことを理解し（例えば、泣くと慰めてくれるなど）、養育者によって自分の情動が調節される体験を重ねることで、自分の情動は恐ろしいものでなくなる。養育者が安全な基地となっていくことで世界に対する脅威は減少していき、基本的な信頼感も育っていく。

ASDの子どもが養育者とのやりとりを求めようとしないことは、こうした相互作用を経験する機会を減らすことになる。ASDの人の情動表出は個人差が大きい。自然にできる人もいれば、いつも無表情という人もいる。表情もコミュニケーションのツールであると言うことを知らないのではと思うような人もいる。謝罪の際にはすまなそうな顔をしなければ、何を言っても反省しているとは思ってもらえない、挨拶は笑顔とセットにするべきである、などはたいいの人にとっては意識することがないほど当たり前のことであるが、ASDの人にはそうではない。無表情であることは周囲の人からは不自然に映るし、このために統合失調症やうつ病と誤診されやすくなると聞く。情動表出は本人にその自覚があまりないだけに、やっかいな問題である。

情動制御における困難は本人が最も苦痛に思うことの1つであろう。これには情動のレパトリー、ストレス解消方法のレパトリーの少なさも影響している。不安になりやすい人は不安になる必要の無いときにも不安になろうとする。カウンセリングが求められる動機になることも多く、カウンセラーは情動制御の手助けをすることになるが、本人もつかみかねている感情を察知

し、わかりやすく説明して返すという、早期の養育者の仕事（ミラーリング）をしていくことが求められる。具体的には共感し、受容し、言葉で伝えるという言わばカウンセリングの基本を丁寧にしていくことになる。言葉で伝える際には要素に分割して、アルゴリズム的に説明すると比較的わかってもらいやすいように思われるが、こちらにとっては自明のことを改めて言葉で説明すると言うことは難しいことである。また、言わなくても通じ合える感じを大事にしている人には抵抗があるだろうし、自分には向いていないと思う臨床家もいるだろう。おそらくこの点がASDの人に対するカウンセリングと定型発達の人に対するそれとの、大きな質的な相違であろう。これはASDの人と定型発達の人との戦略の違いを意識するとわかりやすいのかもしれない。Baron-Cohen (2008/2011) は、『マインドブラインドネス仮説』を発展させ、さらに『共感化－システム化仮説』という理論を提唱している。この仮説は「社会性とコミュニケーションの困難について、『共感性の発達の遅れと障害』と、『完全か平均以上に強いシステム化の技能』との対比によって説明」するものである。システム化とは「分析したり構成したりすることへの衝動」であり、ルールや予測可能であることを求める。先の説明方法はシステム化した思考をする傾向の強いASDの人に合ったやり方なのである。臨床家の多くは共感化の強いタイプであることが容易に予想される。アナログとデジタルの違いと表現した臨床家もいたが、この辺りの違いを自覚することは、重要であると思われる。

他者の情動を感じる際にも問題が生じやすい。情動の伝達は表情や声、身ぶりなどの非言語コミュニケーションで行われることが多く、ASDの人はこれらの手がかりをつかむことに失敗しやすいことが知られている。定型発達の人には相手の目を見ていることが多いが、ASDの人は相手の口や関係ない背景を見ているという (Klin, A. et al., 2003/2006)。定型発達の人には、言葉の内容よりも目などの非言語で伝わってくる方を信じる傾向がある。優しく微笑みながらの「あほやなあ」と怒りのこもった目つきで言う「あほやなあ」の違いはたいていの定型発達の人には明白だが、ASDの人がもし口だけを見ていたのではわからない。感情内容とその表現方法の対応は言語で教えられるのではなく、周囲の人との相互交流の中で自然に習得していく文化や慣習に近いものであるだろう。これをアルゴリズム的に説明しようとしても至難の技である。定型発達の人には乳児の頃からの経験の蓄積があるからできるのであって、ASDの人が身につけるためには、実際の対人関係の中で自覚的に自然な反応を学んでいくということになるのだろうが、容易なことではないだろう。

ASDの人の共感性の問題は、心の理論障害仮説の広まりとともに大きく取り上げられ、多くの要因が関わっていることがわかってきている。Minio-Paluello et al. (2009) は、他者への関心の弱さとともに、他者の不運に対する反応として、自分自身が不快感や不安感を経験する傾向すなわち個人的苦痛 (distress) を強く感じすぎるために、全般的に共感性が低くなるのかもしれないと述べている。共感性は自分本来の感情を抑制した上で、他者の感情を自分のものとして感じるということをするが、情動の制御が難しく、自分の感情が強すぎて抑制できないとしたら共感

難しいだろう。また情動の制御や注意のコントロールが苦手であるため、苦痛を強く感じるような社会的刺激を自動的に避けようとする。これは対処のレパトリーの少なさとつながり、同じ循環の中から出ることができないままとなりやすい。

ASDの人は苦痛の感情だけでなく、愛情や親密さも苦手のようなのである。人に好かれることを望んでいても、シンプルな好意は良いが、もっと強い愛情を示されると理解できないこととして恐怖を感じ、自分から撤退してしまいがちである。特にそれまでの対人関係での失敗経験が多いとこうした傾向が顕著になる。接近しすぎでは耐えられなくなって撤退するという関係を繰り返してしまいがちであり、スキゾイドパーソナリティと見立てられることも多い。カウンセラーとの関係も、早々と分離不安が活性化されてなかなか安定しないように思われるし、そうした不安をはっきりとは訴えない。生育歴や文脈から予測しておき、かすかなサインからいかに読み取って対処するかが重要となるように思われるが、逃げたいモードになってしまった時はそっと遠くから見守るしかないようにも思う。彼／彼女らが長年なじんできた落ち着き方があるのであり、安全の感覚を取り戻した頃にまたこちらの存在に気づいてもらおうというやりとりをしていくと良いように思われる。

#### IV メンタライジング

情動の発達とは心の理論の発達にも強く影響を与える。最近では心の理論よりも、ほぼ同義のメンタライジング（心理化）の方がより広い視座で検討できることから好まれるようである（Frith、2003/2009など）。このメンタライジングは発達心理学者だけでなく、Fonagyを中心とする精神分析家たちも用いており、臨床とリンクする概念でもある。筆者もここからはメンタライジングを採用し、論じていくことにする。

Fonagyらは、メンタライジング能力の発達の基盤として愛着関係を重要視し、メンタライジング能力の発達が自己の組織化を後押しするという論を展開している（Allen & Fonagy、2006/2011）。ASDの人も社会性のレベルが比較的高い場合には、養育者との間に安定した愛着関係を形成することができるが、遠藤（2009）が論じているように、定型発達の愛着とはひと味違うものになってしまうようである。上述の相互作用の難しさと強い関連があり、物理的的近接関係を安定してもてるようになって、表象的アタッチメントの構築が難しい。表象的アタッチメントの構築は心理的な近接関係の維持・回復であり、「自分自身と養育者の双方にとって報酬的な、協調性に基づく関係性」（遠藤、2009）である。この関係性とメンタライジング能力は不可分のものであり、どちらが先とは言えないようなものである。ASDの人は双方の発達が遅れるが、ただ遅れるのではなく、違う方略であることがわかってきている。

先に述べた行動特性を説明するための3つの仮説も皆、結局のところ、ASDと定型発達の人の神経学的な違いがストラテジーの違いを生んでいるというスタンスであったし、Baron-Cohen（2008/2011）の『共感化－システム化仮説』もそうである。養育者の内面を経由しないで学習し

ていくということが高い認知能力、模倣能力とセットになると、共同注意もマインドリーディングも情動的・直感的ではなく、認知的に処理されていく。他者とのやりとりの際、過去経験から最適な行動をシミュレーションしてから行動すると教えてくれたASDの人がいた。メタ認知能力が高いからこそ可能な方略であろう。相手が決まった行動を繰り返す場合には間違いの無いやり方であるが、概して人は予測不能な行動をするので、定型発達の人のようにその意図の理解から出発して最適な行動を考えるのではないと、残念ながらうまくいかない場面は必ず出てくるだろう。

ストラテジーの違いは情報処理や思考過程においても指摘されている。ASDの人は意味処理の際、絵などの形態的特徴を表現する視覚情報が言語より利用されやすい(Kamio & Toischi, 2000)。また内言ではなく、視覚的イメージで思考するという報告もある(Hurlburt et al. 1994)。中には問題解決も視覚的イメージで行う人もいるようで、領域によっては内的言葉で考えるより優れたやり方であるかもしれない。しかしその思考を他者に伝達しなければならなくなると、言葉によらない思考はかなり不利となるだろう。これは言語能力が非定型的な発達と関連すると考えられるが、実際にカウンセリング場面で会う人の中にはほとんど悩まない、内省しないという人もいる。うまくいなくてよくよ、ぐるぐる考えるということはあっても、知的能力から期待されるほどには考えていないという印象を持たれ、知的遅れがあるかのように誤解されることもある。

一方で、言語能力に長け、かつ自分に興味が集中してしまうタイプは、自分の思考に耽溺する傾向がある。いつまでも思索に夢中になることができるし、中には大変な才能を持っている人もいるが、過剰になると内的世界に耽溺しすぎて外の世界との接点を失うほどになってしまう。他者から思い込みの強い人と思われたり、場合によっては妄想と受け取られたりする。Allen (2006/2011) は、歪んだメンタライジングは現実との接点を失った想像であるとしているが、思索に耽溺するタイプはこの歪んだメンタライジングになりやすいと言えるだろう。Allenは「効果的なメンタライジングには、節度のある想像、あるいは地に足のついた想像(grounded imagination)が必要」であり、「人が何を考え何を感じているのかを思い込む代わりに問うてみることを含む、知的な好奇心というメンタライジングの態度が、想像を地に足のついたものとする」と述べている。ASDの人は他者に対する好奇心を持ちにくいので問うことの価値を知らない人が多いように思う。相手に聞いてみましょうと助言してもなかなかできないようであるが、相手の心の中身に関心を持つようになるだけでも大きな変化であるだろう。

## V ナイーブな自己中心性

Frith & de Vignemont (2005) は、アスペルガー症候群の人の自己中心性が、社会的相互作用の難しさをもたらしていると主張している。Frith & de Vignemontのモデルは次のようなものである(図参照)。定型発達の人とは図Aのように、《私—あなた》《私—彼》という、私中心の二者関



係を取り上げる自己中心点的なスタンス (egocentric stance) だけでなく、《あなた―彼》という三者関係も含めた他者中心点的なスタンス (allocentric stance) で考え、自分とは関係の無い他者間の関係を理解することができる。これは社会的なつながりの理解をもたらし、自分に関連する領域と関連のない領域の境界をはっきりさせることに役立つ。一方アスペルガー症候群の人は、《私―あなた》関係がたくさんあるような、ナイーブな自己中心点的なスタンスをもっている。これは図Bのような星形の関係であり、自分が唯一の参照ポイントであるため、他者の視点で全体を見渡すことが難しい。世界は自分中心に回っていると思いやしく、自分とは関連のない領域、すなわち他者の私的な領域が理解しにくくなるため、時に傲慢であると誤解されてしまう。

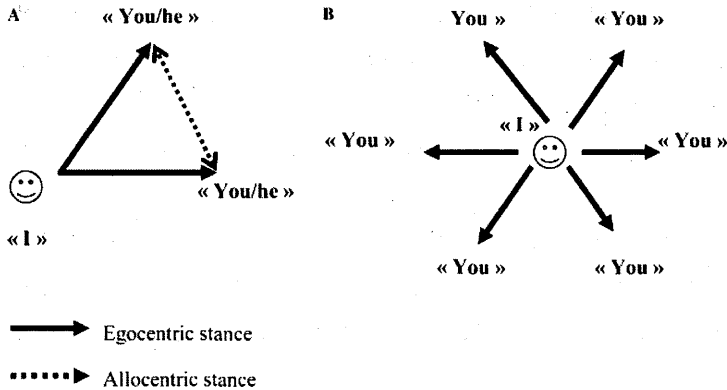
他者の視点で見ることの難しさは従来から指摘されていたが、自己中心点的なスタンスと理解すると、さらにわかりやすくなるように思う。ASDの人は他者の都合を考えていないことが多く、わがままと思われがちであるが、それはそもそもそういう発想がないだけである。機会を捉えて説明すると気の毒なほど反省する。しかし一度理解すれば次から他者中心点的なスタンスで考えられるかという、これはそう簡単なことではない。

Frith & de Vignemont (2005) は、社会の構造や関係についてある程度知識のあるASDの人は他者中心点的なスタンスをとることができるとする。しかし今度は極端に抽象的で現実から離れた客観的態度になりやすい。悪いことは悪いとして曖昧な解決を拒否し、集団の中で浮いてしまうような他者中心である。定型発達では、自己中心点的なスタンスと他者中心点的なスタンスの相互作用が起り、柔軟に行ったり来たりが起こるが、ASDの人はこの相互作用が起りにくい。Frith & de Vignemontは起りにくい要因として、①他者中心点的なスタンスは処理すべき情報が複雑になりすぎること (弱い全体的統合仮説)、②2つのスタンスの間の切り替えを制御することが難しいこと (実行機能障害仮説)、③主観的スタンスと客観的スタンスが混乱しやすいこと (メンタライジング能力の問題)、を挙げている。<sup>注2)</sup>

ASDの人が自らのナイーブな自己中心性や抽象的な他者中心性を、生きやすいように変えていくためには、①②③の要因をどう克服するかが重要になるだろう。これは情報処理のためのワーキングメモリーの容量、切り替えを制御するためのメタ認知能力を必要とし、こうした認知能力に制限がある人に克服を求めるのは酷なこともかもしれない。遠藤 (2009) はアスペルガー症候群のアタッチメントを考える中で、「最も適応的な方途は、生活領域ごとに独立したアタッチメント対象を見出し、それぞれに個別の内的作業モデルを構成していくこと」であり、「高度に行動上の見通しを与える限りにおいて、彼らの行動や感情を相対的に安定したものに導いてくれることが想定される」と述べている。遠藤の述べるモデルはFrith & de Vignemontの星形モデル (図B) に酷似しているだろう。おそらくこうした1対1の関係を複数もつということが彼/彼女らにとって一番安定的であるように思われる。理想としてはアタッチメント対象同士はネットワーク化し、本人を支えているという体制が望ましいと思われるが、こうしたネットワークを本人が受け入れない (想像できない) という問題が生じやすい。

主観と客観の混乱については実際の対人関係の中で自分を相対化して観察する経験をしていくことが必要だろう。通常の児童の発達で見られるような「脱中心化」を達成していく作業と言えるかもしれない。この心の作業はとても力動的で、情動や欲求の影響を受けやすい。何より対人関係の中に自分を投入するという強い動機を持たなければならない。おそらくこの課題にチャレンジするのは一部の人だけだろうが、根気よく取り組んでずいぶん進歩する人もいて、ASDの人の可能性を感じさせられる。

図 Frith & de Vignemontのモデル



## VI 人についての知識

Tomasello (1999/2006) は、養育者との関係を基盤として言語や素朴心理学を習得していくし、何代も継承していく文化を獲得していくのもこの関係を通してであるとする。ASDの人は素朴生物学や素朴物理学に関しては定型発達と何ら差はないが、素朴心理学については発達が遅れていると言われている。素朴心理学は自分の心の動きを説明するための自分なりの心理学のことであり、心の理論とはほぼ同義とされる。通常は他者との経験の共有によって、ある程度共通性のあるものに修正されていくものだが、ASDの人は経験の共有が生じにくく、思い込みや独自の解釈などがいつまでも残ってしまいがちである。また年齢が上がるにつれ、関係が変わるごとに素朴心理学の中身を柔軟に修正していかなければならないが、そうした柔軟性も彼／彼女らが苦手とすることであり、トラブルの元となりやすい。

人に関する知識の乏しさは、雑談が苦手であることも影響しているだろう。たいていの人は皆と同じでいることに価値を置き、他の人が何を考えているかということに関心がある。おしゃべりが好きなASDの人もあるが、そういう人は自分が話したい話を話し、聞きたい話だけを聞こうとする。ASDの人は暗黙の知がわからないということが指摘されるが、語られないけど知られていることを知るためには多くの会話を重ね、微妙なニュアンスを拾っていかなければならないだ

ろう。聞きたいことだけ効率よくと思っていたのでは、明白な情報しか手に入れることはできないだろう。

社会に関する知識の乏しさも障害となっていく。社会には語られない多くの決まりがある。親族の境界線はどこか、倫理的に悪いことと犯罪として悪いことの違いは何か。答えるのに窮した経験がある。たいていの人は何となくわかったつもりで暮らしている。あるASDの高校生に「将来カウンセラーになりたい、子どもと遊んでいるだけで楽そうだ」と言われて、楽なケースだと思ったことはなかったが、彼の目からはそう見えのたかも知れないと思ったので、子どもと遊ぶ以外の仕事もあるのだと説明した。おそらく怒り出すカウンセラーもいるだろうと思うような言い方だったし、定型発達の子がそういう言い方をしたら、陰性転移による挑発と解釈されただろう。思うに、定型発達の子どもがプレイルームに初めて入って、すぐに何をしたら良いか悟ることの方が不思議なことなのかも知れない。

ASDの人は徐々に自分にこうした知識が不足していることに気がついていくことになるが、ずいぶんと不安で恐ろしいことだろうと思う。不安に駆られて様々な努力をするものの、独自の解釈に基づいていたりすると解消に向かわず、かえって傷を深くする可能性もある。信頼できる人がそばにいて、助言してもらいながら学習していくことが一番だが、信頼できるかどうかを見極めるにはメンタライジング能力が必要であり、とんでもない人に信奉しているということもあるようで、悩ましい限りである。

## Ⅶ おわりに

ASDの人の内面を理解するために必要な観点について検討してきた。個人差の大きさは多くの人が指摘するが、障害特性としての弱さや特異さ、優秀さと、発達の遅れているところ、普通にできるところ、追いついたが同年齢の者のようにはできないところなどが入り組んでいて、一人一人本当に違う。さらに過敏さのために、ストレスのかかった状況ではできることもできなくなることもあるし、逆に環境調整によって居心地が良くなるといういろんなことがこなせるようになることもある。齋藤（2011）はセラピストには「複雑なものを複雑なまま受け取る能力」が必要と述べたが、まさにそうした態度で接することが重要となるだろう。

これは骨の折れる作業であり、クライアントの方でも面倒をかけていると考えてしまうようであるが、チャレンジングであるからこそ意義深い仕事だと思う。また、研究対象にされるのではないかと心配してカウンセリングに来れなかったと言われたこともある。確かに研究のための研究をしているのではないかと思うような人もいるので、心配要らないとは言えないように思う。だが本論文で見えてきたように、研究知見はめぐりめぐって支援のためのノウハウの蓄積に結びついていくものである。専門家を尋ねることをむやみに怖がらないで欲しいと思うし、この論文がそうしたノウハウの蓄積に貢献できていることを願っている。

注1) 土居 (1988) は「患者のもたらす問題に無意識が要因として入っていないときは精神分析は無効で」(p. 243) あり、「精神分析が効果を及ぼすためには、患者の訴える問題が現実との軋轢によるものではなく、当人自身に内在する精神的葛藤であることが必要とされる」(p. 244) と述べている。

注2) 若干補足しておく、ASDの人は自分の考えは主観的であり、自分だけのものであること、そして他者の心的状態は自分自身の心的状態とは違うということを本当には理解していないことがあることを指している。

## 文献

- Allen, J. G. (2006). 第1章 メンタライジングの実践 (メンタライゼーション・ハンドブック MBTの基礎と臨床 所収 pp.3-41)
- Allen, J. G. & Fonagy, P.(ed.) (2006). *Handbook of Mentalization-Based Treatment*. John Wiley & Sons, UK. 狩野力八郎 (監修) 池田暁史 (訳) (2011). メンタライゼーション・ハンドブック MBTの基礎と臨床 岩崎学術出版社
- Baron-Cohen, S. (1995). *Mindblindness*. 長野敬・長畑正道・今野義孝訳 (2002): 自閉症とマインド・ブラインドネス 青土社
- Baron-Cohen, S. (2008). *Autism and Asperger Syndrome—The Facts*. Oxford University Press.  
水野薫・鳥居深雪・岡田智 (訳) (2011). 自閉症スペクトラム入門 脳・心理から教育・治療までの最新知識. 中央法規.
- Baron-Cohen, S. Leslie, A. M. & Frith, U. (1985). Does the autistic child have a "theory of mind"? *Cognition*. 21. 37-46.
- Dawson, G., Meltzoff, A. N. , Osterling, J., Inaldi, J., & Brown, E. (1998). Children with autism fail to orient to naturally occurring social stimuli. *Journal of Autism and Developmental Disorder*, 28, 479-485
- 土居健郎 (1988). 精神分析 講談社学術文庫
- 遠藤利彦 (2005). 発達心理学の新しいかたちを探る. 遠藤利彦 (編) 発達心理学の新しいかたち. 誠信書房. pp.3-52
- 遠藤利彦 (2009). アスペルガー症候群におけるアタッチメント. 榊原洋一 (編) 別冊「発達」30 アスペルガー症候群の子どもの発達理解と発達援助. ミネルヴァ書房 pp.82-97
- 遠藤利彦 (2012). 発達心理学における発達障害 (自閉症) 論. 臨床心理学, 12(5), 金剛出版, pp.678-679
- Frith, U. (2003). *Autism : Explaining the Enigma Second Edition*. Blackwell Publishing. 富田 真

- 紀・清水康夫・鈴木玲子（訳）（2009）．新訂 自閉症の謎を解き明かす．東京書籍．
- Frith, U. & de Vignemont, F. (2005). Egocentrism, allocentrism, and Asperger syndrome. *Consciousness and Cognition* 14 719-738
- Happe, F.G.E. (1995). The Role of Age and Verbal Ability in the Theory of Mind Task Performance of Subjects with Autism. *Child Development*. 66. 843-855.
- Hobson, R. P. (1993). *Autism and the Development of Mind*. Psychology Press. 木下孝司（監訳）（2000）．自閉症と心の発達—「心の理論」を越えて—．学苑社．
- Hobson, R. P. (1989). Beyond Cognition : A Theory of Autism. In G. Dawson (Ed.). *Autism : nature, diagnosis, and treatment*. Guilford Press. 野村東助・清水康夫（監訳）（1994）．第2章 認知を越えて—自閉症の理論—日本文化科学社, pp. 21-46.
- Hurlburt, R. T., Happe, F. & Frith, U. (1994). Sampling the form of inner experience in three adults with Asperger syndrome. *Psychological Medicine*, 24, 385-395.
- 神尾陽子（2009）．自閉症の成り立ち—発達認知神経科学的研究からの再考 高木隆郎（編） 自閉症 幼児期精神病から発達障害へ 星和書店 pp.87-100
- Kamio, Y. & Toischi, M. (2000). Dual Access to Semantics in Autism : Is Pictorial Access Superior to Verbal Access? *Journal of Child Psychology and Psychiatry*. 41(7). 859-867
- Klein, M. (1930). The Importance of Symbol-Formation in the Development of the Ego. 村田豊久・藤岡宏（訳）（1983）．自我の発達における象徴形成の重要性 西島昌久・牛島定信（責任編集） メラニー・クライン著作集1 子どもの心的発達 誠信書房 pp.265-281
- Klin, A. Jones, W. Shultz, R. and Volkmar, F (2003) : The enacted mind, or from actions to cognition: lessons from autism. *Philosophical Transactions of the Royal Society*. B358 345-360
- 河田紗弥架・岡田俊訳（2006）：能動化した心、行為から認知へ：自閉症から学ぶ 高木隆郎・P.ハウリン・E.フォンボン（編） 自閉症と発達障害研究の進歩 vol.10 星和書店 297-323
- 黒木俊秀（2012）．DSM-5と発達障害 臨床心理学, 12(5), 金剛出版, pp. 685-686
- Minio-Paluello, I. Lombardo, M. V. Chakrabarti, B. Wheelwright, S. & Baron-Cohen, S. (2009). Response to Smith's Letter to the Editor 'Emotional Empathy in Autism Spectrum Conditions : Weak, Intact, or Heightened? ' *Journal of Autism and Developmental Disorder*, 39, 1749-1754
- 齋藤久美子（2011）．みどり精神分析研究会でのコメント．
- 佐藤弥・魚野翔太・十一元三（2009）．広汎性発達障害の神経基盤 須田治（編）情動的な人間関係の問題への対応, 金子書房, pp.205-226